

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380940

研究課題名(和文) アタッチメント理論に基づくビデオ育児支援法の介入効果の検討

研究課題名(英文) Intervention effects of attachment theory-based "Video-feedback Intervention to promote Positive Parenting-Sensitive Discipline(VIPP-SD)"

研究代表者

池邨 清美(近藤清美)(Ikemura, Kiyomi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：80201911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アタッチメント理論に基づく親子関係調節技法であるビデオ育児支援法のわが国における適用可能性とその介入効果を検討するために、2歳から5歳の子どもをもつ7名の母親と、児童養護施設の養育者2名にこの技法を実施した。その結果、通常の母子でも社会的養護においても、ビデオ育児支援法はオリジナルの形のままで適用可能であり、ビデオ育児支援法により育児効力感が高まったり育児ストレスが軽減するといった効果が見られた。しかし、わが国の育児文化を考慮して修正すべき点もいくつか見つかった。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to examine the applicability of attachment theory-based intervention, "Video-feedback Intervention to promote Positive Parenting-Sensitive Discipline (VIPPSD)" for Japanese parenting. Seven mothers and two care-takers in child institution participated in this study. The results indicated the VIPPSD was applicable to Japanese mothers and caretakers with its original form. It enhanced parenting efficacy and decreased parenting stress. However, some consideration for Japanese cultural issues was needed in video shooting. Because of widespread misunderstandings in attachment concept and time-out method for children's bad behaviors, it turned out that the original manual of VIPPSD will be changed to explain these concepts in detail.

研究分野：Developmental Psychology

キーワード：attachment video-feedback intervention mother-infant

1. 研究開始当初の背景

アタッチメント理論は、Bowlby(1969/1982)が理論的枠組みを提唱し、Ainsworth et al.(1978)が開発した親子間のアタッチメントを評価する Strange Situation Procedure により大きな発展を見た。さらに、Main et al.(1985)のアダルト・アタッチメント・インタビューによる成人のアタッチメント表象の評価法の開発により、親子間のアタッチメントの世代間伝達が明らかとなり、成人期のアタッチメント研究が進展するとともに、アタッチメント研究はそれらの研究成果を応用する臨床的研究の時代となった。

そうした臨床的応用の中でも親子関係への介入が最も注目されている。アタッチメント理論に基づく親子関係調節技法では、親の子どもへの感受性を取り上げ、それに介入することが主になされている。その際、親子のやり取りをビデオ映像に収め、それを支援者と親と一緒に視聴することにより、子どもの発する信号の意味を考え、敏感な対応ができるように助言する方法が主流と言えるものである。本研究で取り上げられるビデオ育児支援法 (Video-feedback Intervention to promote Positive Parenting-Sensitive Discipline: VIPP-SD, Juffer et al., 2008)は、そうした親子関係調節技法の一つである。

ビデオ育児支援法は、オランダで開発されたものであるが、4回から6回の短期の介入技法であり、親子の状況に応じて個別に実施できることに特徴がある。また、対象者の状況やニーズにより、様々なモジュールが用意されている。したがって、わが国に導入することが比較的たやすいと考えられ、この技法を取り上げることにした。

しかしながら、しつけや子育てのやり方は文化により大きな違いがあり、欧米で開発された親子関係調節技法が、わが国で通用するのかについては疑問がある。アタッチメント研究の歴史において、わが国特有の育児文化を無視して、欧米で開発されたアタッチメントの評価技法をそのまま導入したことにより、アタッチメント理論そのものの妥当性を疑わせるような議論が巻き起こったことは記憶に新しい。親子関係調節技法においてこうした混乱をもたらさないためにも、わが国における適用妥当性を慎重に検討する必要があると言えるだろう。

2. 研究の目的

アタッチメント理論に基づくビデオ育児支援法について、オリジナルの形のままでわが国の母子関係調節技法として適用可能であるのかを調べることを第一の目的とした。また、どのような対象者で適用可能であるのか調べるために、親子だけでなく、社会的養護における養育者と子どもの関係も取り上げた。このようにビデオ育児支援法を実施することによって、親子の関係性や子育てにお

いてどのような効果が得られるかを検討した。

3. 研究の方法

研究協力者は、2歳から5歳までの子どもとその母親、7組と、児童養護施設の養育者と担当する子ども、2組であった。

ビデオ育児支援法は実施マニュアルに沿って行われた。所定の場面での短時間のビデオ撮影があらかじめ行われ、次の回に撮影されたビデオ映像について、所定のテーマに沿って特定の部分が取り上げられ、介入が行われた。その際、子どもの行動の解説を行いながら、母親の感じたことや発見したことを聞くようにした。これを4回、行った。ビデオ育児支援法の実施は、各家庭や社会的養護の場合は施設を訪問して個別で行った。

ビデオ育児支援法の介入効果を明らかにするために、ビデオ視聴についての母親や養育者の感想を毎回聞くとともに、介入前後において、1)子どもの問題行動、2)育児ストレス、3)育児効力感について質問紙のよって調べた。

4. 研究成果

研究期間中に、研究代表者が2回、大学を移動したため、新しい環境において研究対象者を募ることや研究のセットアップのために時間を要し、データの収集はかろうじて実行できたが、分析については十分に行えなかった。また、研究途中において、親子関係を評価する方法について再吟味を行い、そのための時間も要した。

合計9ケースについてビデオ育児支援法を実施した結果、以下のことが明らかとなった。

まず、わが国でビデオ育児支援法をオリジナルのマニュアル通りに実施することが可能であることがわかった。また、社会的養護の場面でも、適用が可能であることがわかった。ただし、いくつかの点で実施に注意すべき点があることも明らかとなった。

ビデオ育児支援法で一番重要な点が、親や養育者が子どもが自分とは異なる視点や意図をもつことを理解し、育児におけるメタ認知機能を高めることであることがわかった。親の気づきとして語られる内容として、この点が一番多かった。次に、自分自身が子どもと遊ぶ映像を支援に使うことで、実際にやっている行動を強化され、褒め方や行動の制限について具体的な行動として取り上げられることで、親や養育者が子どもへの関わりを変え、そのことが子どもの行動を変えることにつながり、介入効果が見えやすくなった。ビデオ育児支援法の回数を進めるごとに、養育行動の変化を見ることができた。さらに、支援は個別に進めることができ、その時々の子育ての疑問について、ビデオ映像を用いて具体的に話し合ったり、それに付随した問題も話し合うことができ、ビデオ育児支援法が子育てのエンパワーメントの役割

を果たすことも明らかになった。

介入効果の分析については十分に行えていないが、用いた質問紙の得点から見ると、介入後に育児効力感が上昇し、育児ストレスが減少した。また、子どもの問題行動が減少したが、実際に問題行動が減少したというよりも、子どもに対して柔軟な見方ができるようになったことで、それまで問題行動としていたことを問題と感じなくなったという側面もあるようであった。

こうした成果の一方で、ビデオ育児支援法をわが国で用いるにあたって、見知らない人の前で遊んでいるところを撮影されることでの親子それぞれの気恥ずかしさや良い行動をしなければならぬという圧力が生じることがあり、自然な関わりをとらえることが難しいことがわかった。そこで、親(養育者)子が興味を持って遊びに集中できるように用いるおもちゃの工夫が求められ、子どもが遊びに乗ってこない場合に短時間で切り上げたり、違う遊びに切り替える柔軟な対応が求められることがわかった。また、期待するような遊びが展開しなかった場合、マニュアルに指定されたテーマにこだわらないで、出現した子どもの行動の意味について一緒に考えることが重要であることがわかった。

大体において、わが国でビデオ育児支援法をオリジナルの形で行うことに問題はなかったが、次の2点については、オリジナルのマニュアルでは誤解を産むことがわかった。一つは、ビデオ育児支援法は、アタッチメント理論に基づくものであるが、わが国ではアタッチメントについての誤解が多くあり、スキップを取ったり子どもに従うことが親としての良い関わりと誤解されがちである。今回の研究から、現行のマニュアルに書かれていることだけではなく、アタッチメント理論とそれに基づく子どもへの関わりのコツについては別途、説明する必要があることが明らかとなった。また、二つ目には、しつけ方略の一つであるタイムアウトについては、わが国の育児文化では誤解されることが多く、何のために行うのか、行う際の注意点など、丁寧に説明することが必要であることがわかった。

最後に、関係性の評価についても吟味を行ったが、わが国においてもDタイプ・アタッチメントは通常の親子においても1割程度見られることがわかり、親のアタッチメント表象と子どものアタッチメントが関連するというアタッチメントの世代間伝達も強くみられることがわかった。今後は、このことを踏まえたうえで、親子関係調節を考える必要があることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

1. K.Kondo-Ikemura, K.Behrens, & T. Umemura Japanese mothers' prebirth

Adult Attachment Interview predicts their infants' response to the Strange Situation procedure: Revival of Strange Situation in Japan three decades later. *Developmental Psychology*, in press (査読在り).

2. 近藤清美 発達障害とアタッチメント心の科学 198巻, Pp.56-59. 2018年 (査読なし)

3. 徳山美千代・近藤清美・田辺肇 アタッチメント理論に基づく介入—社会的養護下のビデオ育児支援法とアタッチメント・ベイスト・プログラム 静岡福祉大学紀要, 第13巻, Pp. 25-34, 2017年 (査読なし)

4. 近藤清美 アタッチメント関係の生涯発達 教育と医学, 761巻, Pp.4-11, 2017年 (査読なし)

5. 近藤清美 子どもの感性をもたらず養育環境 児童心理学 2016年2月号 Pp.19-25. 2016年 (査読なし)

6. 近藤清美 アタッチメントと親子の発達心理学 新しい家族 58巻, Pp.2-20, 2015年 (査読なし)

7. 近藤清美 アタッチメントの観点から母子関係をサポートする 母子保健 674号 P8 2015年 (査読なし)

8. 近藤清美 ビデオ育児支援法による親子関係支援 子育て支援と心理臨床 9巻 Pp.13-18 2014年 (査読なし)

9. 近藤清美 乳幼児の基礎研究から臨床へ、臨床から基礎研究へ—シンポジウムを終えて 乳幼児医学・心理学研究 23巻 Pp.56-60 2014年 (査読なし)

〔学会発表〕(計4件)

1. K.Kondo-Ikemura, K.Behrens, & T. Umemura Intergenerational transmission of attachment security in Japan with the Strange Situation. Society for Research in Child development, 2018年

2. K.Behrens & K.Kondo-Ikemura Parenting in Japan: Japanese mothers' view of amae and its association with parenting beliefs and cultural values. International Conference of Attachment 2017年

3. K.Kondo-Ikemura & K.Behrens Are Amayakasu mothers ideal mothers?: A Q-sort study in Japan. Society for Research in Child Development. 2015年

4. K.Kondo-Ikemura Cultural issues on "Video-feedback Intervention to promote to Positive Parenting (VIPP)" in Japanese

Mothers. World Association of Infant
Mental Health. 2014 年

〔図書〕(計1件)

近藤清美・尾崎康子 社会・情動発達とその
支援 ミネルヴァ書房 2017 年, 324 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池邨(近藤)清美(Kiyomi Kondo-Ikemura)
帝京大学・文学部・教授
研究者番号: 80201911

(2) 研究分担者

徳山 美知代(Michiyo Tokuyama)
静岡福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号: 70537604

(3) 連携研究者

田辺 肇(Hajime Tanabe)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 60302361